

日本人学生と韓国人留学生における 依頼の談話ストラテジー使い分けの分析

—語用論的ポライトネスの側面から¹⁾—

樋田 和美

要 旨

依頼の談話は依頼の難易、被依頼者との上下、親疎といった規定因によって談話構造や依頼表現などを使い分けるといった様々な談話ストラテジーを使用している。本稿では語用論的ポライトネスの側面から談話ストラテジーとして(1)前置きの使用率(2)情報要求の使用率(3)依頼表現の文末形式を分析した。その結果、日本人学生(JS)は「前置き」を「難・上」で使用するのに対し、韓国人留学生は「上」でしか使用していないという違いがあった。また依頼表現の文末形式ではJSが「上」では「言いさし」を「同」では「言い切り」を使用するのに対し、KSでは「易」「同」で「言い切り」を使用し、「言いさし」の使用率はJSよりも低いことがわかった。

キーワード： 依頼 語用論的ポライトネス 規定因 前置き 言いさし

1. 本研究の目的

私たちは日常生活において様々な依頼を行っている。この依頼という発話行為は依頼者が受益者となるため、依頼をされる側の不利益や負担を取り除いたり軽減したりする努力が必要であり、円滑な対人コミュニケーションのために、依頼者は場面に応じ、談話構造や依頼表現を使い分けするなど、様々な談話ストラテジーを使用している。このようなさまざまなストラテジーの使用は依頼行為の本質の一つであると考えられる。そのため日本語だけでなく多くの言語で依頼という発話行為には多様なストラテジーが使用されている²⁾。その談話ストラテジーとして使用される形式や選択基準は言語によって異なっているが、それはその言語の背景にある文化的影響を受けているためだと考えられる。

本稿では日本語における依頼の談話ストラテジーとして考えられる要素が依頼の難易や上下、親疎といった規定因によってどのように使い分けられているのかを明らかにすることを目的としている。また、韓国人留学生と日本語母語話者との談話ストラテジーの使い分けがどのように異なるのかを明らかにすることによって、日本語の依頼という発話行為を運用する上での問題点や課題がどこにある

のかを探り、日本語教育への示唆とすることを目的とする。

2. 語用論的ポライトネスの定義

依頼という発話行為は依頼者と被依頼者という人間関係の中で相手に何らかの負担を要求する行為であり、そこにはさまざまな人間関係維持や依頼達成のための戦略が使用される。本稿では談話戦略の分析にあたってこのような発話の運用効果に焦点を当てた理論として、宇佐美(2000)で述べられている「語用論的ポライトネス」を援用する。

宇佐美は Brown&Levinson (1987) の「ポライトネス」を狭義の言葉遣いや敬語使用といった「規範的ポライトネス」と区別し、「語用論的ポライトネス」と定義している。さらに宇佐美はこの「語用論的ポライトネス」を「円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動」と定義し、その言語行動には言語形式の丁寧さのみならず、「話題導入頻度」「あいづちの頻度」「スピーチレベルシフト」「中途終了型発話」「談話構成」「メタ言語行動」「談話行動」なども含まれるはずだとしている。

本稿では日本語の依頼談話において、宇佐美の定義した「語用論的ポライトネス」に含まれる言語行動を、以下で先行研究から限定し分析していくこととする。

3. 先行研究および本研究の分析基準

日本語における依頼談話の特徴として先行研究で扱われているものの中から語用論的ポライトネスの言語行動として、「談話構成」と「中途終了型発話」の二点に限定した。それ以外の「～いただけますか」「～てもらえますか」のような依頼表現の敬語使用を「ポライトネス」の一つとして分析している先行研究もあるが、依頼表現の敬語使用は宇佐美(2000)における「規範的ポライトネス」にあたるとして本稿での分析の対象から外した。

ここでは語用論的ポライトネスの言語行動である「談話構成」と「中途終了型発話」の二点に関して先行研究を概観し、その中から分析要素とすべき典型的な戦略を抽出する。そして本稿におけるその戦略の分析基準を明らかにする。

3.1 談話構成

依頼談話の談話構成を研究したものとしてはまず、柏崎(1993)がある。柏崎は日本語の依頼談話の特徴を、「前置き表現」や「ポーズ」によって相手を話の場へ引き込む働きかけを行った後、「用件内容」に進む点にあるとしている。

また依頼談話の構成や発話機能を分析の観点としたものに猪崎(2000A, B)があ

る。猪崎は依頼談話を「依頼予告」「先行発話」「依頼発話・応答」の大きく三つの話段³⁾という単位に分け、日本語母語話者が「依頼予告」→「先行発話」→「依頼発話」の順になるのに対し、フランス語母語話者の場合は「依頼予告」の話段がなく、「先行発話」から始まるとしている。また「先行発話」の発話機能を「情報提供」と「情報要求」に分けて分析を行い、日本語母語話者が「情報提供」を使用することが多いのに対し、フランス語母語話者は「情報要求」を使用することが多いと指摘している。

その他、池田他(2000)では依頼談話を「開始部分」と「依頼部分」の大きく二つに分け、「開始部分」に含まれる発話機能を「呼びかけ」「挨拶」「自己紹介」の三つに、「依頼部分」を「内容表示」「情報提供」「配慮」「主依頼」の四つに分類し、「依頼部分」の発話機能の出現順序が日本語母語話者では「内容表示」→「情報提供」→「主依頼」の順であるのに対し、一部の中国語母語話者では「主依頼」→「情報提供」の順になると指摘している。

このように先行研究から明らかにされた日本語の依頼の談話構成の特徴としては次の二点が挙げられよう。まず依頼発話の前に協力要請の「前置き」や「予告」など依頼の前提となる情報のやり取りがあること。そしてその情報のやり取りは「情報要求型」よりも「情報提供型」が多いことの二点である。この二点が日本語の依頼の談話構成におけるストラテジーではないかと考えられる。よって本稿では依頼発話前の「先行発話」「前置き」の有無、およびその種類を分析することで依頼の談話構成を明らかにする。

3.2 中途終了型発話（言いさし）

依頼表現の文末が中途終了型発話（以後「言いさし」）になることに関しては先行研究でも日本語の依頼表現の特徴として挙げられている。エレン・ナカミズ(1992)では場面にふさわしい日本語の依頼表現が親疎関係、上下関係、依頼の負担の三つの要素とどのようにかかわっているかをアンケート方式で調査し、依頼表現の使い分けの傾向を明らかにしている。その中で依頼表現に付随する表現として「～かなあ」「かしら」などの「ぼかし表現」に着目し、日本語母語話者の方が日本語学習者より使用頻度が高いことを指摘している。

また猪崎(1993)でも依頼表現を使用する「用件内容」の部分では発話末を言い切らず、聞き手に「用件内容」を察してもらうという特徴があると指摘している。このことから日本語の依頼表現の発話末は文末を言い切らない「言いさし」表現が多いという特徴が指摘できる。

日本語の依頼発話において「言いさし」の使用が多い理由は、ポライトネス理論⁴⁾で述べられているフェイス侵害行為（Face Threatening Act : FTA）を

行う際の FT 軽減行為が日本語ではこの「言いさし」に当たるからではないかと考えられる。ポライトネス理論では依頼のような聞き手のフェイスを侵害する発話行為においては何らかの FT 軽減行為を行うとされている。その FT 軽減行為はフェイス侵害度が小さいと行われないうが、フェイス侵害度が大きくなるに従って明示的な FT 軽減行為を行い、フェイス侵害度が最も大きい場合には FTA を行わないとされている。つまり日本語における依頼表現の「言いさし」とは明示的な FT 軽減行為の一つであり、語用論的ポライトネスの一つの言語行動と考えられるのである。以上のことから本稿では「言いさし」を依頼談話のストラテジーの分析対象として取り上げることとした。

3.3 本稿の分析基準

本稿では、3.1 談話構成、3.2 中途終了型発話（言いさし）で指摘した日本語の依頼談話の特徴とされている依頼の談話ストラテジーが依頼の難易や親疎、上下によってどのように使い分けられるのか、また日本語母語話者と日本語学習者の談話ストラテジー選択に違いがあるのかを明らかにするため、表1のように猪崎(2000A,B)と池田他(2000)の分析の単位と観点を踏まえた上で、本稿の分析の単位とその名称および分析の観点を以下の三つに設定し、規定因による使い分けを分析していく。

<本稿での分析の観点>

- ①「前置き」および「先行発話」の有無
- ②「先行発話」における「情報要求」の使用率
- ③依頼発話の文末の「言い切り」と「言いさし」の使用率

表1 先行研究と本稿の分析単位と主な分析観点

先行研究				本稿	
猪崎(2000A,B)		池田他(2000)			
単位	分析観点	単位	分析観点	単位	分析観点
依頼予告	有無	内容表示	有無	前置き	①有無
先行発話	情報提供 or 情報要求	情報提供	順序	先行発話	②情報要求の使用率
依頼発話		配慮	有無	依頼発話	③文末の「言い切り」 「言いさし」の使用率
		主依頼	順序・文末		

4. データ

4.1 対象者

対象グループは日本語母語話者と韓国人日本語学習者である。日本語学習者のグループを韓国語母語話者に限定した理由は、本研究が依頼という発話行為の運用に焦点を当てており、運用以前の依頼の言語形式はすでに習得しているレベルである上級レベルの日本語学習者に限定する必要があったことと、実際、そのレベルの日本語学習者としては韓国人留学生在が日本の大学では一番多かったからである。

また先行研究においても韓国人日本語学習者を対象としたものが、他の言語を母語とする日本語学習者より少ないことも挙げられる。エレン・ナカミズ (1992) のように韓国語母語話者を対象としたものも見られるが、それは英語や中国語話者に比べ、韓国語母語話者と日本語母語話者との類似点を指摘するに留まっている。韓国語母語話者に焦点を当てて依頼のストラテジーの分析を行っているものは、柳 (2001) 以外には見当たらない。そのため本研究では韓国人日本語学習者の特徴を明らかにするため、日本語学習者のグループを韓国人日本語学習者に限定することとした。なお、グループ間の均質性を図るため、両グループとも大学生、大学院生に限定した。日本人学生 (以下 J S) は首都圏の国立大学に在籍している日本語を母語とする大学4年生9名 (男3名、女6名) で、年齢は22才～24才である。一方、韓国人留学生 (以下 K S) は日本人学生と同じ大学に在籍している韓国語を母語とし、日本語学習歴のある大学生および大学院生10名 (男5名、女5名) で、年齢は23才から32才、日本滞在歴は1ヶ月から5年9ヶ月と幅広いが、全員日本語能力試験1級の合格者である。

4.2 ロールプレイ

データは依頼の難易、上下、親疎の3つの規定因を組み合わせた8つの依頼場面 (表2) を設定したロールプレイを計画し、2000年10月から12月にかけて実施し、資料として収集した。ロールプレイの場面や被依頼者に関しては、対象者にとって現実的な場面や被依頼者になるよう配慮した。また「上下」の「下」の設定に関しては目下に対する依頼は命令に近くなることから、「下」ではなく、「同」の同級生を被依頼者として設定した。

ロールプレイは一人の対象者に対して8つのロールプレイを続けて行ってもらった。各ロールプレイの前にロールカードを読ませ、内容の確認を行ってからロールプレイに入った。ロールプレイの被依頼者は対象者全員、同一人物で、「上」の大学教官役は「親」「疎」とも30代女性が行った。また「同」の同級生役も「親」「疎」とも20代女性の日本語母語話者の大学院生がすべて行い、対象者による

差が出ないようにした。

表2 ロールプレイ依頼内容

		被依頼者	難	易
親	上	指導教官	大学院受験のための推薦状を書いてもらう	今日の論文指導の開始時間を遅らせてもらう
	同	親しい同級生	明日のアルバイトを急に変わってもらう	駅まで車で送ってもらう
疎	上	知らない大学教官	奨学金申請のための推薦状を書いてもらう	研究室にある本を貸してもらう
	同	親しくない同級生	来週テストの範囲を教えてください、プリントをコピーさせてもらう	筆記用具と紙を貸してもらう

5. データの分析および考察

5.1 前置き・先行発話分析

「前置き」「先行発話」の難易、上同、親疎といった規定因ごとの使用率を表3に示す。表3では「前置き」「先行発話」を使用しないものを①、「前置き」のみ使用するものを②、「先行発話」のみ使用するものを③、「前置き」「先行発話」の双方を使用するものを④とし、それぞれの規定因ごとの使用率を出した。

その結果、J Sの「前置き・先行発話」の規定因による使い分けについては以下の三点が指摘される。

- (1) 全体的に「先行発話」の使用率が高く、どの規定因においても「先行発話」を使用している③と④で90%以上の使用が見られる。
- (2) 規定因による使い分けは③「先行発話のみ」と④「前置き+先行発話」という「前置き」の有無によって行っている。
- (3) 「前置き」の使い分けに有意差が見られるのは「難易」と「上同」で、その中でも「難易」の有意差が最も強く、次に「上同」と続くが、「親疎」では有意差が見られない。

一方、K Sの使い分けの特徴は以下の三点である。

- (1) 「先行発話」の使用率が高いのはJ Sと同じだが、①の「前置き・先行発話なし」の使用率が全規定因でJ Sの約1.8倍～4.5倍とJ Sに比べ高い。
- (2) 規定因による使い分けはJ S同様、③「先行発話のみ」と④「前置き+先行発話」という「前置き」の有無によって行っている。
- (3) 「前置き」の使い分けに有意差が見られるのは「上同」のみで、「難易」「親

疎」では有意差が見られない。

このようにJS、KS共に全体的に「先行発話」を使用しながら「前置き」を規定因によって使い分けることが明らかとなった。だが使い分ける規定因はJSとKSで異なり、JSでは「難易」「上同」で使い分けに有意差が見られるのに対し、KSでは「上同」でしか使い分けに有意差が見られない。また「前置き」を最も強く使い分ける規定因も異なり、JSが「難易」で最も強く使い分けの差が見られるのに対し、KSは「上同」で最も強く使い分けており、「前置き」を談話ストラテジーとして使用する規定因がJSとKSで異なっていることがわかる。

「上同」で使用するストラテジーが増加することは、依頼行動のストラテジーを日本語母語話者と韓国人日本語学習者、および韓国語母語話者の三者で比較した柳(2001)でも報告されている。柳(2001)では「親」に限定した場合、韓国語母語話者が「同」から「上」によって使用するストラテジーが増加することが指摘されている。この傾向は日本語母語話者や韓国人日本語学習者とも異なった傾向であり、韓国語母語話者の特徴であると考えられる。

ただし柳(2001)では増加したストラテジーが「前置き」とは限られていない。また「疎」に限定した場合、「同」から「上」によってストラテジーが変化するかどうかは明らかにされておらず、「難易」に関しても分析の対象外である。そのため、本研究との単純な比較はできないが、KSの依頼談話のストラテジーの一つの傾向として捉えることは可能であろう。本研究でもKSの「前置き」の使用率はJSよりも総じて高く、特に「上」での使用が高いのは、依頼談話におけるこのような韓国語母語話者のストラテジーの使用傾向との関連性を窺わせる。

表3 前置き・先行発話使用率 (%)

		前置き	先行発話	難	易	上	同	親	疎
J S	①	×	×	2.8	3.8	2.8	5.6	2.8	5.6
	②	○	×	2.8	0.0	0.0	2.8	2.8	0.0
	③	×	○	**61.1	**83.3	*66.7	*77.8	66.7	77.8
	④	○	○	**30.6	**5.6	*30.6	*5.6	19.4	16.7
K S	①	×	×	7.5	16.5	12.5	12.5	5.0	20.0
	②	○	×	5.0	0.0	0.0	5.0	5.0	0.0
	③	×	○	50.0	60.0	***45.0	***65.0	50.0	60.0
	④	○	○	35.0	15.0	***40.0	***10.0	30.0	20.0

注1) JSの度数はn=36、KSはn=40である。

注2) 斜線太字の項目は χ^2 検定の結果、規定因間で使い分けに有意差の見られた項目である。

注3) *は $P < 0.05$ 、**は $P < 0.01$ 、***は $P < 0.005$ を示す。

5.2 先行発話の情報要求使用率分析

前項の前置き・先行発話分析でJS, KSとも「先行発話」の使用率が高いことが指摘されたが、「先行発話」の発話機能には「情報提供」と「情報要求」の二つの発話機能がある。この二種類の発話機能の内、「情報要求」の使用率を示したものが表4である。

表4の①は「情報提供」と「情報要求」の両方を使用したもので、②は「情報提供」は行わず、「情報要求」のみ使用したものである。「情報要求」の使用率は前項の「前置き・先行発話」と異なり、JS, KSによる違いは余りなく、両者の「情報要求」の使用には以下に指摘する共通の使用傾向が見られる。

- (1) 「情報要求」を多く使用している規定因は「同」である。
- (2) 「情報要求」のみは「上」と「疎」に対しては使用しておらず、その内「上」に対しては「情報提供」と一緒でも使用していない。

このように「情報要求」は人間関係の規定因の中の「上」と「疎」では使用できないという使用制限のあるストラテジーであることが推察できる。この使用制限に関しては、JS, KSとも同じであるが、この傾向がKSの母語である韓国語にも見られるかどうかは明らかではない。

表4 情報要求使用率 (%)

		情報提供	情報要求	難	易	上	同	親	疎
J	①	○	○	16.7	16.7	0.0	33.3	16.7	16.7
S	②	×	○	2.8	5.6	0.0	8.3	8.3	0.0
K	①	○	○	20.0	10.0	0.0	30.0	15.0	15.0
S	②	×	○	2.5	5.0	0.0	7.5	7.5	0.0

注1) JSの度数はn=36、KSはn=40である。

注2) 規定因によるX²検定は度数が少なく、度数0の項目もあるため行っていない。

5.3 依頼表現文末形式分析

次に依頼表現の文末の「言い切り」と「言いさし」が規定因によってどのように使い分けられるかを分析する。表5は依頼表現の文末を「言い切り」と「言いさし」に分類し、その使用率を出したものである。

「言いさし」とは依頼表現の文末に「が」「けれども(けど・けれど・けども)」といった接続助詞が付いたものと依頼表現の文末が「て形」や「と・ば・たら・なら」などの条件節で終わっているものを指し、依頼表現に疑問形の「か」「ませんか」や終助詞の付いたものは「言い切り」とした。

表5 依頼表現文末形式使用率 (%)

		難	易	上	同	親	疎
J S	言い切り	38.9	47.2	****19.4	****66.7	47.2	38.9
	言いさし	55.6	44.4	****69.4	****30.6	44.4	55.6
K S	言い切り	***55.0	***80.0	****47.5	****87.5	70.0	65.0
	言いさし	***42.5	***12.5	****42.5	****12.5	25.0	30.0

注1) J Sの度数はn=36、K Sはn=40である。

注2) 斜線太字の項目は χ^2 検定の結果、規定因間で使い分けに有意差の見られた項目である。

注3) ***は $P < 0.005$ 、****は $P < 0.001$ を表す。

表5からJ Sの依頼談話の文末形式の特徴としては以下の二点が挙げられる。

- (1) 全体的に「言いさし」の使用率が高いものの「易」「同」「親」では「言いさし」よりも「言い切り」の方が使用率が高くなっている。
- (2) 「言い切り」と「言いさし」の使い分けに有意差が見られた規定因は「上同」のみで、「上」に対しては「言いさし」を使い、「同」に対しては「言い切り」を使うといった使い分けが見られる。

一方、K Sの特徴としては以下の三点が挙げられる。

- (1) 全体的に「言い切り」の使用が高く、全規定因で「言いさし」よりも「言い切り」の使用率の方が上回っている。
- (2) 「言い切り」と「言いさし」の使い分けに有意差が見られた規定因は「上同」と「難易」で「同」「易」では「言い切り」を、「上」「難」では「言いさし」を使うといった使い分けが見られる。
- (3) 「上同」「難易」の使い分けは「上同」の方が「難易」よりも強い。

以上の特徴からJ SとK Sの依頼表現の文末形式の使い分けは、次の二点にまとめられる。

- (1) J Sに比べK Sは「言いさし」の使用率が低く、逆に「言い切り」の使用率が高い。
- (2) 「上同」においてはJ S、K S共に「言い切り」と「言いさし」の使い分けが見られるが、「難易」においてはK Sしか使い分けをしていない。

このようにK Sは依頼表現の文末形式では日本語の依頼表現の特徴である文末の「言いさし」の使用がJ Sに比べ少ないが、その理由について韓国語母語話者数名にフォローアップインタビューを行った。その結果、韓国では人に依頼する場合、文末を明確に述べるのが良いとされ、学校教育でもそのように指導されたことがあるという答えが得られた。

また、日本語と韓国語のコミュニケーションストラテジーの違いを論じているものに渡辺(1985)があるが、渡辺は其中で以下のように述べている。

日本人は相手との距離を常に一定に保ち、その距離の内側へとふみこむことをつつしみ、嫌うのに反し、韓国人は他人との心理的距離は出来るだけせばめとり払うべき障壁だと考える。(渡辺 1985 : 139)

そして日本人のそれを「思いやりのストラテジー」とし、それに対し韓国人のそれを「親愛のストラテジー」と呼び、日・韓のコミュニケーションストラテジーの違いを端的に表している。

このように日本人が相手の内側に立ち入るのをつつしみ、嫌う表現として「ぼかし表現」の一種である「言いさし」を多用するのに対し、韓国人は相手との距離を狭めるためには明確に表現することが良しとされ、このような韓国人のコミュニケーションストラテジーがJSに比べKSの「言いさし」の使用率の低さに影響しているのではないかと考えられる。

6. 規定因による談話ストラテジー項目の選択

ここでは前項で分析を行った三つの談話ストラテジー項目が規定因によりどのように使い分けられているかを中心に考察していく。

前置き・先行発話の分析からJS、KS共に「前置き」を規定因によって使い分けていることが、また先行発話の情報要求使用率分析からは「情報要求」の使用制限のある規定因が明らかとなった。さらに依頼表現の文末形式分析からは「言い切り」と「言いさし」が規定因によって使い分けられていることがわかった。

以上の「前置き」「情報要求」「言い切り」「言いさし」の談話ストラテジー項目と規定因との関係をまとめたものが表6である。

表6 規定因による談話ストラテジー項目の選択

規定因 談話ストラテジー項目	難	易	上	同	親	疎
前置き	●		● ■			
情報要求				● ■		
言い切り		■		● ■		
言いさし			●			

注1) ●はJS、■はKSを示す。

注2) X²検定において有意差の見られた項目の内、対立する規定因の使用率の高い項目にのみマークした。尚、JSの「上同」における「言い切り」「言いさし」は双方に著しい違いがあるため両方の項目にマークした。

注3) 「情報要求」はX²検定を行っていないが、対立する規定因で使い分けが最も大きな「上同」にマークした。

表6からJ S、K Sの依頼談話において使用される談話ストラテジーと規定因による使い分けの違いを、使用される談話ストラテジー項目とその規定因の優先順位の二点から考察していく。

まず、使用される談話ストラテジー項目は「上同」ではJ S、K Sとも変わらないが、「難易」では違いが見られる。J Sは「難」では「前置き」を使用することで「難易」の使い分けを行っているのに対し、K Sは逆に「易」で「言い切り」を使用することで「難易」の使い分けを行っている。J S、K S共に「難易」の使い分けは見られるものの、そのための談話ストラテジー項目が異なっているのである。

次に規定因の優先順位についてはJ S、K S共に「上同」が最も使い分けの項目が多く、優先順位も高い。次に「難易」と続き、「親疎」では談話ストラテジーの使い分けは見られない。

日本語母語話者のストラテジーを使い分ける規定因の順序について山口(1997A,B)は上下関係、親疎関係、依頼内容の順になると指摘している。本研究でも上下関係が最も優先順位が高いことは山口と共通するものの、その次に来る規定因の順位が異なることは、本研究の分析方法が山口と異なっているためだと考える。

本研究では談話ストラテジーとして「前置き」「先行発話」の有無および依頼表現の文末形式である「言いさし」の三点に限定した。この三点において「親疎」の使い分けが見られなかった理由として考えられるのは、「親疎」が主に依頼表現や敬語表現といった言語形式によって使い分けを行っており、それ以外に談話ストラテジーを使い分ける必要がないためではないかと考えられる。つまり本研究で分析した談話ストラテジー項目は「上同」および「難易」を使い分ける要素として機能しており、「親疎」で働く要素でないと考えられる。

7. 日本語教育への示唆と今後の課題

本稿では日本語母語話者と韓国人留学生が、主に依頼の談話ストラテジーの内、談話構成と依頼表現の文末形式が規定因によってどのように使い分けられるかを明らかにした。使い分けが見られる項目も日本語母語話者と韓国人留学生の間で違いが見られた。このことは日本語母語話者と韓国人留学生では依頼の場面で異なった談話ストラテジーを使うことがあることを示唆している。場面によって選択する談話ストラテジーが異なるということは、談話ストラテジーを用いる本来の目的である円滑な対人コミュニケーションにおいても支障をきたす場合も考えられる。

上級レベルに達した日本語学習者が円滑な対人コミュニケーションを行うた

めには、依頼表現といった文法項目の運用に加え、こういった表現や談話構成を場面に応じて選択することが必要であり、そういった面で本研究は韓国人留学生を対象とした日本語教育の現場に日本語の依頼の談話ストラテジーの使い分けのモデルを示したという意味で一つの示唆を与えられるのではないかと考える。

だが韓国語母語話者が日本語母語話者と異なったストラテジーを選択するには、韓国語における依頼談話の文化的、言語的背景もあり、学習者に日本語話者と同じストラテジーを指導することには慎重に対処しなければならない。実際の指導にあたってはコミュニケーションに支障をきたすストラテジーが何なのかを明らかにした上で行う必要がある。このような日本語でのコミュニケーションに支障をきたす韓国語のストラテジーの特定に関しては、渡辺（1985）のような先行研究も見られるが、依頼談話に限定したものはなく、今後の課題とするところである。

最後に本研究では「ポライトネス」という概念を細分化し、「語用論的ポライトネス」の面からのみ考察を行ったが、「ポライトネス」には「規範的ポライトネス」である依頼表現や敬語使用などの待遇表現が「親疎」による使い分けには特に重要な位置を占めていると考えられる。依頼談話の全貌に迫るためにはやはり「規範的ポライトネス」とされる依頼表現や敬語表現も含めた研究も必要である。本稿では誌面の都合上、依頼表現や敬語表現については触れることができなかった。「規範的ポライトネス」と「語用論的ポライトネス」の要素が実際の依頼談話においてどのように運用されているのかを包括的に明らかにすることは今後の課題としたい。

<注>

- 1) 宇佐美（2000）が、Brown & Levinson（1987）の「ポライトネス」を定義したもので、宇佐美はその中でBrown & Levinsonの「ポライトネス」を従来的な意味での言葉遣いの丁寧さを指す「規範的ポライトネス」と区別し、「語用論的ポライトネス」と定義している。本稿では宇佐美(2000)の定義した「語用論的ポライトネス」の側面からの考察を行う。
- 2) 日本語を含む9ヶ国語の談話ストラテジーを比較した橋元(1992)によるとほとんどの言語で依頼の方略として「依頼の前提となる事実の陳述」が使用されるとしている。
- 3) 「話段」という単位はポリ・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』(1993)で談話分析の単位として使用されたもので、猪崎は「話段」を談話分析の単位として使用した理由として、「これ

が全ての日本語談話の分析に有効であるか疑問もあるが、依頼や勧誘という隣接ペアが比較的是っきりしている場合、談話展開のメカニズムを調べるには有効である。」と述べている。

- 4) ポライトネス理論については Brown & Levinson (1987) および、宇佐美 (2000)、宇佐美 (2001) を参照した。

<参考文献>

- 池田裕・三好理英子・浅井尚子・章奕(2000)「中国人日本語学習者の言語行動—日本語と中国語における依頼—」『多摩留学生センター教育研究論集』2
- 猪崎保子(2000A)「『依頼』会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ」『日本語教育』104号
- _____ (2000B)「接触場面における『依頼』のストラテジー—日本人とフランス人日本語学習者の場合—」『世界の日本語教育』10 国際交流基金日本語センター
- 宇佐美まゆみ (2000)「ポライトネス理論と日本語教育」横浜日本語教育フォーラムレジメ 米加大学連合日本研究センター
- _____ (2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—『談話のポライトネス Discourse Politeness』」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4部会』国立国語研究所 pp.9-58
- エレン・ナカミズ (1992)「日本語学習者における依頼表現—ストラテジーの使い分けを中心として—」『待兼山論叢』26 大阪大学文学部
- 生越まり子(1995)「依頼表現の対照研究—朝鮮語依頼表現—」『日本語学』14-11 明治書院
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に—」『日本語教育』79号 日本語教育学会
- 熊井浩子(1992)「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11-13 明治書院
- 小林正佳(1995)「発話行為としての依頼の理解と丁寧さにかかわるもの」『横浜経営研究』第16巻 第3号 横浜国立大学経営学会
- 中川良雄 (1998)「日本語依頼の表現—依頼のストラテジーと日本語教育—」『京都外国語大学研究論叢』50 京都外国語大学
- 橋元良明 (1992)「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11-13 明治書院
- ポリリー・ザトラウスキー (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジ

一の考察』くろしお出版 pp.59-68

水野かほる (1996) 「「依頼」の言語行動における中間言語語用論 (2) —directness と perspective の観点から—」『言語文化論集』18 (1) 名古屋大学言語文化部

三好理英子・浅井尚子・池田裕 (2000) 「依頼の談話構造—中国人学習者の場合—」『第9回小出記念日本語研究会発表予稿集』

山口和代 (1997A) 「留学生の発話行為と文化的要因に関する一考察—中国人および台湾人留学生を対象として—」『異文化間教育』11号

—— (1997B) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因—中国人および台湾人留学生を対象として—」『日本語教育』93号

柳慧政 (2001) 「韓国人日本語学習者と日本語母語話者による依頼行動の比較研究—ストラテジーの使い分けを中心に—」『第63回学術大会 proceedings』 韓国日本学会

渡辺吉鎔 (1985) 「会話分析にみる日・韓コミュニケーションギャップ」『慶応義塾大学日吉紀要』第1号

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language Usage* Cambridge University Press

Gumperz, J (1982) *Discourse Strategies* Cambridge : Cambridge University Press

(国士舘大学非常勤講師)